



### 打てば響く

第13代校長 大川 雄哉

「この生徒はよく考えてしっかりと発言していますねえ。思考力というよりは思索力に富んでいるように思います。」

平成二年秋、立江中学校が全学級公開の同和教育の授業を行ったとき、同振課の指導主事H先生がふっと感想を漏らされた。

H先生とはずっと昔、勤務校の同僚だったので少しは世辞があったかもしれないが、我が意を得て安堵したような記憶がある。というのは、折角の授業だから「差別をしない」というような決意声明で授業を終わって欲しくない、もっと差別の実態と自分自身との係わりを、答えを探すのではなく根拠から考えて欲しいと思っていたからである。

実際の授業では、どの学級もねらいとする意図が浸透してしっかり考えさせている場面があった。しかも的確な考えに基づいた多様な発言は、私を含めた参観者に静かな感銘を残していた。質の高い授業だった。今も授業それぞれの場面を思いおこすことができる。H先生の言葉はあながち過大とは言えないと思っている。

立中での二年間、保護者の方々は勿論、近所の方、地域の市議会議員、郷土史家、老人会、立中草創期の卒業生など、随分多くの方々が校長室に足を運んでくださった。今もご交誼を頂いている方も少なくないが、誰も立中を非難される方はいなかった。雑談や教育談義等々から貴重な示唆を頂いた。元来ここは尚学の地であり、昔から教育への関心、理解の高い土地柄、その豊かで質の高い風土に育まれて、すばらしい個性が生まれやすい筈はない。同時期に地域の小学校に勤務されていた優秀な女性の校長先生は「家庭・地域のレベルの高さがすごい所です。子どももすばらしいです。楽しようと思えばできますよ。でもそれでは学校が見劣ります。意地でも理想的な教育をめざさないかね」としみじみと話されたことがある。流石と思う。

二年目の秋、校区内を巡るオリエンテーリング大会を行った。確か十のポストを通過の条件で各ポストに問題があって、答えをカードに記入してゴールの学校に帰ってくるというもの。各学級男女の生活グループのチーム編成。歩いても走ってもよい。コースも自由。但し、タイムレースである。チームが分解したときは失格。

結果は三十六チーム全員ゴール。しかしどのチームも疲労困憊。ゴール後一斉に倒れるチームもあった。一～二チームの失格も予想していたけれど皆無。立中生の凄さを見せつけられた秋の一日だった。

しかし、凄さはその後にあった。事後の感想文にある多様で個性的な感受性に驚いた。無論、「このオリエンテーリングでは最後までグループみんながよく協力してがんばってゴールできました」ときうような優等生的感想文もあったけれど次のようなユニークで凄い感想文もあった。

三年生K君

「最初のうちはワイワイガヤガヤ賑やかにやっていたんだけど、途中からみんな無口になって、しんどいわ、もう歩けんわ、の連発。そこでポストを探す競争に変えた。地図上の丸印は実際には直径五十メートルほどだから範囲は広い。でも面白かった。結果はA君が六個で一番。何でも面白がることも大事なことなのだな。」

三年生Hさん

「しんどい、もうイヤだ、こんなことを計画したヤツの顔が見たい、歩くの速すぎる、と文句ばかり。最初からみんなバラバラ。他のチームに追い抜かれたけれど、精一杯の悪口言って帰ってこれた。不思議に、三月までこのグループでやっていけそうな気がした。」

打てば確実に響く立中生がいた。